機能性失禁に対する排尿誘導における動物介在活動の試み

山本　千鶴[1)]，山内　直樹[2)]

[1)] 老人保健施設はぎの里　リハビリテーション課
[2)] 老人保健施設はぎの里　通所リハビリテーション事業所

要旨：

【はじめに】

排尿誘導を拒否する機能性失禁の2事例に対し，動物介在活動を用いた排尿誘導を行うことで，良好な結果を得たので報告する．

【対　象】

認知症を有する要介護１，障害高齢者の日常自立度Ａ，認知症高齢者の日常生活自立度Ⅱａ，移動は歩行車歩行が自立し，失禁のため紙パンツを使用していた83歳の男性事例と，認知症を有し要介護３，障害高齢者の日常自立度Ａ，認知症高齢者の日常生活自立度Ⅱｂ，移動はシルバーカー歩行が自立し，失禁のため紙パンツと尿とりパッドを併用していた97歳の女性事例を対象とした．

【方　法】

動物介在活動には金魚を用いて，トイレの前に飼育用の水槽を設置し，定時排泄誘導の際に，「一緒に『元気金魚』に餌を上げましょう」と声をかけ，水槽まで一緒に移動して金魚に餌を与えた後，排泄を促すこととした．

【結　果】

事例は，いずれも排泄誘導の声かけに対し拒否することが多かったが，動物介在活動を実施した結果，円滑な誘導が可能となり，事業所に滞在中の失禁はなくなった．

【考　察】

排泄を他人が“誘導”することは一般常識から逸脱した行為であり，当事者の理解と協力を得ることのできない状況で施行すると，円滑に遂行できないだけでなく当事者の自尊心を傷つける可能性を有している．動物介在活動による“誘導”は，誘導の目的を公にすることに支障のない「金魚の餌やり」に変更することで，心理的抵抗が解消するとともに，排尿行為に対する動機づけの促進に繋がったことから，円滑な誘導が可能となったものと考えられた．

Ⅰ．はじめに

排泄は排便と排尿とからなる．排泄のメカニズムは，便は大腸の蠕動によって直腸に送られ，尿は尿管の蠕動によって膀胱に送られ，それにより便や尿が直腸や膀胱にたまるとそれぞれの出口に近い筋層が伸ばされ，伸展受容器が刺激されると副交感神経を介して仙髄に送られ，内括約筋に“弛緩”の指令が下されるとともに，一部は脳に送られて尿意や便意を感じる．内括約筋の弛緩により排泄物は下降し，外括約筋を伸長し，外括約筋の収縮がなければ，尿道や肛門から排泄物が排泄される．これらの一連の過程は排便反射・排尿反射と呼ばれる反射で生じる[1)]．しかし，反射による排泄は時と場所を選ばないため，社会参加するにはその社会で定められた「便器」に排泄することが求められる．そのため，生後２年以上かけて便意や尿意を感じてから外括約筋を随意的に収縮させてこれらを禁制することを習得する[1)]．

「便器」以外に排泄することを失禁と呼び，その原因により溢流性失禁，切迫性失禁，腹圧性失禁，機能性失禁とに分類される[1)]．溢流性失禁は，疾患による肛門や尿道の狭窄や，薬剤の副作用で直腸や膀胱が収縮できなくなることで絶えず漏れ出るように排泄される状態をいう．切迫性失禁は，神経系の障害により強い便意や尿意を感じると同時に排泄されるもので，高齢者では直腸や膀胱の過剰な活動と括約筋の収縮力低下により生じる場合もある．腹圧性失禁は，骨盤底筋群の筋力低下により，笑ったり立ち上がったりして腹圧が上がると便や尿が漏れるものをいう．これらの失禁に対し機能性失禁は，直腸や膀胱には損傷がないが，運動機能の障害により便器までの移動や排泄動作ができなかったり，認知機能の低下により意思表示ができなかったり，便器の場所が分からないた

Key Words：機能性失禁，排尿誘導，動物介在活動

めに生じたり，意欲が低下することにより生じるとされている失禁で，介助者の能力を向上することで防ぐことのできる失禁と考えられる[1) 2)]．

一方，動物を通じて生活の質の向上をもたらすための動機づけの促進となるような，あるいは教育的，娯楽的機会を与えるプログラムとなるような活動を動物介在活動（Animal Assisted Activity）と呼ぶ．動物介在活動は，動物の世話に参加することが，人と交流する動機づけや，物理的な運動量の増加，気分転換や他者を養育しようとする行動を引き出す効果があるといわれている[3)]．

今回我々は，機能性失禁を呈した対象者に対し動物介在活動を実施し，機能性失禁を改善した事例を経験したので報告する．

Ⅱ．対　象

事例１．完全房室ブロック（ペースメーカー使用），変形性腰椎症，認知症を有する83歳の男性で，要介護１，障害高齢者の日常自立度Ａ，認知症高齢者の日常生活自立度Ⅱａであり，移動は歩行車歩行自立し，失禁のため紙パンツを使用していた．

事例２．変形性膝関節症，変形性腰椎症，慢性心不全，認知症を有する97歳の女性で，要介護３，障害高齢者の日常自立度Ａ，認知症高齢者の日常生活自立度Ⅱｂであり，移動はシルバーカー歩行自立し，失禁のため紙パンツと尿とりパッドを併用していた．

図１．動物介在活動として用いた金魚

金魚は「元気金魚」と名付け，飼育用水槽をトイレの前に設置した．

Ⅲ．方　法

動物介在活動には金魚を用いた．金魚には，元気に育つようにとの思いを込めて『元気金魚』と命名し，トイレの前に飼育用水槽を設置した（図１）．

そして，定時の排泄誘導の際に，「一緒に『元気金魚』に餌を上げましょう」と声をかけ，水槽まで一緒に移動して『元気金魚』に餌を与えた後，排泄を促すこととした．

Ⅳ．結　果

事例１は，排泄誘導の声かけに対し，激しく興奮し，怒り，誘導を拒否することが多かった．稀に女性スタッフの声かけは応じることがあったため，できる限り女性スタッフが声かけを行うようにし，成功例をもとに声かけの内容や対応も工夫しながら行ったが効果はなかった．そこで動物介在活動を実施した結果，スタッフの性別に関わらず円滑な誘導が可能となり，事業所に滞在中の失禁はなくなった．

事例２は，排泄誘導の声かけに非協力的であり，また，「トイレの誘いなど必要ない．排泄は誰しも行きたいときに行くものだ．」と発言する周囲の利用者の影響もあり，誘導したいタイミングで誘導できないことが多かったため，動物介在活動を実施した．その結果，対象の拒否および周囲の利用者の影響もなくなり，円滑な誘導が可能となり失禁がなくなった．

Ⅴ．考　察

高齢者の排尿障害に関する実態調査では，施設入所の虚弱高齢者は30％から60％前後がおむつになっているという報告や[4)]，介護老人保健施設などに入所中の高齢者7758人のうち4097人（52.8％）の高齢者に失禁が認められ，そのうち4人に3人が尿失禁であるとの報告[5)]，あるいは尿失禁の問題を抱える高齢者は，在宅高齢者で約20％，施設入所高齢者で約50％あり，最も多い尿失禁は機能性尿失禁という報告[6)]などがあり，高齢者において排尿障害は高頻度に発生する障害であるといえる．排泄の禁制は社会参加の条件として獲得したものであるため[1)]，その機能が障害されると必然的に社会参加への意欲は低下し，社会参加の機会も減少し，延いては生きる意欲の低下に繋がる可能性があることから，排泄障害の治療やケアは重要であり，排泄障害によって奪われてしまうその人の生活（活動）や社会参加に視点をおいた評価を行わなければならない．単にトイレで排泄できるように支援することだけが排泄ケアの目的ではなく，トイレで排泄できることは手段であって，穏やかに生活すること，人と接する機会を取り戻すこと，

その生活機能を維持回復させる支援が排泄ケアの本来の目的である．したがって排泄ケアにおいては，それぞれの高齢者の残存能力に適した排泄のスタイルを見つけ出す必要があり[7]，排泄の生理機能のどこにどのような支障があるのか，排泄動作における①尿意・便意の有無，②トイレ，便器の認識，③移動動作，④脱衣，⑤移乗動作，⑥後始末，⑦移乗動作，⑧着衣，⑨移動動作といった一連の過程のどこが，どのようにできないのか，あるいはできるのかを評価し，障害の状態を総合的に判断しなければならない．

今回の事例はいずれも直腸や膀胱には損傷はなく，便器までの移動や排泄動作も可能であったが，認知機能の低下により意思表示が不十分であるとともに，運動の遂行が円滑に行えないことにより生じた機能性失禁に分類されるものと考えられた．機能性失禁に対する排泄ケアには，ある程度尿意の自覚がもてる可能性のある高齢者に尿意の確認やトイレ誘導を行い，成功した場合は賞賛（強化）する排尿自覚刺激行動療法（Prompted Voiding）や，高齢者の排尿パターンに合わせてトイレに誘導する習慣化排尿誘導（Habit training），ケア側が一定の時間を設定してトイレに誘導する定時排尿誘導（Timed Voiding）などがある[8]．我々はこの２事例に対して定時排尿誘導を試みたが，効果を得ることはできなかった．その原因は，排尿ケアの方法が誤っていたのではなく，これら全ての方法において必要となる“誘導”という介入が効果的に行われなかったことにあった．すなわち誘導に対して，事例１は激しい興奮と怒りとともに拒絶し，事例２は本人だけでなく周囲の利用者も拒絶したことにある．そこには，「トイレの誘いなど必要ない．排泄は誰しも行きたいときに行くものだ．」という事例２の周囲の利用者の発言にみられるように，排泄という行為が「社会の文化」に押し込められ，「個人の文化」の中に隠されているものであり[1]，そこに他人が“誘導”として介入することは非日常的で，かつ一般常識から逸脱した行為であり，当事者の理解と協力を得ることのできない状況で施行すると，円滑に遂行できないだけでなく当事者の自尊心を傷つける可能性を有しているものと考えられた．

そこで金魚を用いた動物介在活動による定時排尿誘導を実施した結果，円滑な誘導が可能となり失禁を改善することができた．動物介在活動は，生活の質の向上をもたらすため，または動機づけの促進となるような，あるいは教育的，娯楽的機会を与えるプログラムであり，さまざまな環境で実施でき，動物の世話に参加することが，人と交流する動機づけや，物理的な運動量の増加，気分転換，あるいは他者を養育しようとする行動を引き出す効果があるといわれている[3]．今回の事例において，動物介在活動を用いることで円滑な定時排尿誘導が可能となったことは，“誘導”する目的が「個人の文化」であり公にすることに支障のある排泄から，公にすることに支障のない「金魚の餌やり」に変更されることで，誘導に対する心理的抵抗が解消したこと考えられる．また対象は，金魚に話しかける，金魚を見て笑顔になるなどの変化を同時に認め，「金魚の餌やり」が施設利用時の日課になるなど，他者を養育しようとする自発的行動が生まれることで，物理的な運動量の増加や排尿行為に対する動機づけの促進に繋がり，円滑な誘導が可能になったものと考えられた．

以上のことから，排泄ケアにおいては排泄障害の原因を評価し，適切な排泄ケアの方法を選択することは重要であるが，それに加えて，排泄ケアを実施する際には，生活の質や尊厳という視点から介入方法を工夫することが必要であり，その一つの方法として動物介在活動は有効であると考えられた．

【参考文献】

1) 澤口裕二：アウェアネス介助論下巻．有限会社シーニュ，東京，pp420-1457，2011.
2) 川村佐和子，後藤真澄，中川英子，山崎イチ子，山谷里希子編：自立に向けた食事・調理・睡眠・排泄の支援と終末期の支援．建帛社，東京，pp125-141，2009.
3) I. Robinson編　山崎恵子訳：人と動物の関係学．インターズー，東京，pp75-77，1997.
4) 福井準之助編：プライマリケアのための高齢者尿失禁のマネジメント．医薬ジャーナル社，大阪，pp6-10，2004.
5) 高植幸子・林智世・金原弘幸・吉田和枝：三重県における高齢者の排泄ケアにおける実態調査．三重看護学誌，９：111-116，2007.
6) 鈴木基文，本間之夫：排泄のメカニズムと排泄障害，ふれあいケア，全国社会福祉協議会出版部，pp12-16，2012.
7) 船津良夫：高齢者　安心・安全ケア．日総研出版，16(1)：48-50，2012.
8) 西村かおる：高齢者の排尿障害のケア，老健，全老健共済会，pp44-49，2011.